小池辰雄著作集 第五巻 『百世の師ヒルティー』

ヒルティーの人間観

──晩年の著作をめぐって──

地上の天国

（『眠られぬ夜のために』上巻“Für Schlaflose Nächte”Ⅰ）

# 【目次】

●１月１日　●１月１３日　●２月７日　●２月２５日　●７月１３日　●９月２７日　●１０月７日

『眠られぬ夜のために』は、上、下二巻で、いずれも一年、３６５日に区分されていて、宗教的随想集といった性質のものである。ここに紹介する上巻は、１９０１年、今世紀の夜明けに初版が出た。著者６８歳のときである。

本巻は筆者も座右において愛読している書の一つであるが、かつて筆者がこれを翻訳しているので（『ヒルティー著作集第四巻、眠られぬ夜のために』〔一〕白水社版）、今回の引用文はそれによることとする。

その訳書の解説の中でこう書いた、

「彼がいかにその深遠な信仰、円熟した人格、富豊な人生体験、な学識、卓抜なる見識などをもって多面多彩に、縦横に、この３６５の短文を通して語りかけてくるか。人生万般のこと、人間一切のなやみに対して彼はたのもしい権威と深い愛をもって語ってくれる。」

大方の読者は──筆者もそうであるが──別に眠られない夜があるわけでないであろうが、著者の言葉から、なぐさめや、はげましや、道しるべや、さまざまな注意や心がけなどを承ることが楽しいから、眠りも更に安らか、目覚めも更にさわやか、というわけであろう。何よりの精神生活の糧である。

まず上巻の３６５の随想から、ほんの一部分を紹介し、筆者の所感を述べさせていただく。

# ●１月１日

「つねに偉大な思想に生き、末梢的なことは軽視するようにつとめよ。これは、一般に言って、人生の多くの苦難と悲哀を最もたやすく乗りこえさせる道である。最大で同時に一般に最も解り易い思想は、今やキリスト教の形における神信仰である。

しかしまた昔から今まで、いじけた余りにも狭いキリスト教がある。これはキリストの本質に、教説に、いささかも、あるいは全くは適合しないものであって、そのためにすでに多くの気高いまた教養の高い人々をキリストの教説から遠ざけてしまったのである。

もしあなたが人生の幸福を心がけているならば、神学や教会主義をもってキリスト教に代えてはならない。まさにあなた自らキリスト教をその源泉に即して求めよ。すなわち福音書の中に、しかもその中でも特にキリスト自身の言説の中に求めよ。実にキリストの言説はどんな哲学にもこれにぶべきものを見ない。」

元日劈頭の言葉として実に適切な内容と思う。真に「偉大な思想」には、何らかの精神（霊）的な力がある。それを受けそこなうと、いくら「偉大な思想」に接してもダメである。キリストは

「わが言葉は霊なり、生命なり」

と言った。キリストの言葉は実は思想以上のものである。キリストの言葉を観念的に受けとる限り、いつまで経ってもその真義はつかめない。言葉という現象を通して、それが発せられている根源現実、根源の霊的人格の中に信じ入る質の受け方をするとき、キリストの言葉が驚くべき生命的なものであることを体感体受するようになる。

「神学」（Theologie）や「教会主義」（Kirchlichkeit）が生きた信仰を妨げるものであることはヒルティーが注意している通りである。ゲーテもそのことを『ファウスト』の中でなじっている。勿論、神学も、言の深い意味においての神学ならば、信仰の羅針盤たる役割を果す重さをもっているといえるから、大切な学問であることは言うまでもない。「教会主義」とヒルティーがいっているのは、教会の組織や制度や信条や祭儀などにとらわれた在り方のことで、大切な生命的な在り方に硬化現象を起こさせるものである。「教会」とはそもそも本質的にはどういうものか、ということを同じくスイスの現代神学者エミール・ブルンナーが『教会の誤解』（Emil Brunner：Das Missverständnis der Kirche）という本で解明しているが、一般の教会が、本来あるべき教会──聖霊と聖言による信仰者の人格共同体──のすがたから逸脱して、いわゆる「教会主義」的存在となっているために、ヒルティーも攻撃したわけである。ヒルティーは、しかし、そうだからといって教会はダメと否定しているのではない。教会が「教会主義」的な教会になったらダメだというのである。わが国では、「無教会主義」的無教会となったらダメだと申したいわけである。

大切なことは

「自らキリスト教をその源泉に即して求めよ」

キリスト教の原点に帰入することである。それは正に

「福音書のキリスト自身の言説」

に直接体あたりすることである。私に言わせると、言説のみでなく、キリストの言動一切である。キリストという神の現象体そのものの実存に帰入することである。信仰とはそのような劇的な体あたりで、福音書のキリストに体あたりして降参すること、キリストを体受し、キリストに帰一してゆくことにある。パウロやヨハネやペテロは、そのような質においてキリストを信受した。ヒルティーがここに唱えているこころもそういうところにあると思う。

# ●１月１３日

「地上の天国は、人間が神と絶えず想いを一つにすることのほか、何ものをも最早切願しないときにのみ始まる。来るべき天国も、この他の何ものでもあり得ない。しかも、人間がこの心情なくしては、そのような天国に適い、そこに安住できようとは、理性的にも全く同様に認められ得ない。」

神意と一つになるにはどうしたらいいか。自分をあるがままキリストの中に投げ入れることである。どこから投げ入れるか。十字架という門を通してである。おのれを棄てる、とは、贖主キリストの中に棄てることである。かくて我意が棄てられると神意なる本願が入ってくるから、「神と想いを一つにする」ということになる。絶えずそのようになるのは勿論容易なことではないが、祈り心がそれへの道である。そこに「地上の天国」が現ずる。そしてこの天国はつねに隣人にわけ与えられなければならない。神意は必ず深い愛に基いているから、本願の愛が隣人に流れてゆく。かくて本当の「地上の天国」が展開してゆく。

# ●２月７日

「福音書が聖霊と名づける霊を、おのが生活に獲得することのみが重要である。そうすれば、この霊がそれから先の一切をなす。」

実に断然たる言で、私はの然りを以てヒルティーのこの言に応えたい。私は二十歳のときにキリスト教に入信したが、永いこと「無教会」の流れの中にいた。しかしどうも何か欠けている。信仰のすじはいいのだが、どうも信仰が硬い。本当の力、本当の愛、本当の生命からどうもずれている。頭や心ではわかっているが、何か突破されていない。十字架のあがないというが、本当に自分が十字架されていない。それは祈りが足りないためであることがわかった。キリストの十字架の下における棄身の祈りを体験して、俄然突破が来た。突破とは何か。聖霊が私を突破し、突入して来たのである。これが聖霊のバプテスマであった。全身が霊撃を受けてしびれた。合掌の手が離れない。このようなみ霊のバプテスマの最も強烈なものをパウロが受けた。それは使徒行伝に三度告白されてある。聖霊に突破された私自身はや八方破れである。

聖霊は何ものとも替えられない。これは私にとっても、存在や実存の原動力、原始力であるからである。聖書がそれ以来楽に読めるようになった。福音書のキリストが本当に力となって来た。ありがたくて仕方がない。聖霊のバプテスマを受けたのが五十歳のときであるから、それから２１年（１９７５年）が経った。相対的人間小池がどうであろうと、そんなことと関わりなく、しかも逆説的には深く関わりつつ、聖霊に生きている隠れたる私は、誰が何と言うとも、正に霊止（ひと）なる小池として天国人である。これは絶対恩寵の現実で、いつわりなき告白である。これは救済の事実の告白のほかの何ものでもないからである。

爾来、使徒的信仰、福音の原始に、原点に帰入せよ、と叫んでいる。世々のまことのキリスト者は皆聖霊の人であった。キリスト教史の底流をなすものは聖霊の流れである。この地下水は何ものもこれを犯すことが出来ない。聖霊はまた火である。この霊火はいかなるこの世のあらしもこれを消すことができない。聖霊は神・キリストの霊である。一切を荷ない、一切を包み、一切に浸透する力をもった実に自由自在な霊である。

# ●２月２５日

「上を仰ぎみる純一で全く正直な愛のまなざしは、どんな美しい形式的な祈りよりも、これを受けて下さる者にとって、価値があることは確かである。我々もまた小さな子の、然り、また小さな動物さえもの、そういう印象深いまなざしを、あらゆる美辞麗句よりも愛する。」

本当にそうだ。イエスが

「汝らの如くならでは天国に入る能わず」

と喝破されたのは、幼児の純真な心に、まなざしに神が宿るからである。幼児には国境がない。どこの国の幼児を見ても可愛い。イデオロギー以前の世界であるからである。大人がもう一度超イデオロギーの世界に入って、そこの神霊の気を吸ったら、万人は愛の世界を展開することになり、そのときこそ戦争はやむであろう。平和平和などといって、がなり立てることはなくなるであろう。平安がたましいに臨んでこそ、世は平和をさわがなくとも平和になってゆくであろう。いと小さき存在をあなどる者は地獄（ゲヘナ）に堕ちてゆくことになる。小さき存在は守護天使に護られている。

# ●７月１３日

「最大の仕事も、それを分割し、いつもただ一番手近かなものだけを眼中に置けば、小さなものになる。」

これは本書最短の言。仕事の秘訣ズバリである。

# ●９月２７日

「人間との交際、然り、さらには神のあらゆる被造物との交渉における唯一の正しい原則は、何ものをも徒らに苦しめず、あらゆるものに同情をよせ、いかなるものにも安けさと生の喜びを与え、しかもまた、そのことが自分の本分をみたし、単に生をむさぼることのないようにもとめることこれである。」

こういう宗教的な心根からの良識と生活態度が日本にはいかに乏しいことであろう。

# ●１０月７日

「我ら一たび全く愛の国に踏み入らんか、この世がどんなに欠けたものであろうとも、なお此処は美しく豊かなものとなる。この世はもっぱら愛を生きるための機会から成り立っているからである。」

この極めて短い言葉にヒルティーのハートが輝いている。珠玉の一言である。然り、愛の国は、愛を生きる人、人助けをする人のまわりに展開する。